

定家歌の「霜」のイメージについて

片山 享

さえとほる風のうへなる夕月夜あたる光に霜ぞちりくる

定家の建仁元年（一一〇一）二月、老若五十首歌合の歌である。冴えかえって吹く風の上に夕月が出ている。その凍てついたような月の光に当たりながら、霜が砕け散ってくるという透明感をもつ歌であるが、現実の景というよりも形而上的な、超現実的とも云える、内奥で捉えた純感覚の世界である。「あたる光に霜ぞちりくる」について、赤羽淑氏は、

月光と霜とがひとつになつて散ってくる様子である。「あたる光」の中に月光と霜の両方を含めており、「しもぞちりくる」という表現も他に例はなく、これも現象に即した独特な捉え方であり、感覚的な表現である。風によって隔てら

れている二つの空間の上方に月は光り、下方には霜が月光を浴びながら散ってくるという同時現象を捉えて「さえとほる」によって上下を統一している。^(注)

と鑑賞されている。ここで問題にしたいのは、「霜ぞちりくる」という表現で、霜がまるで浮遊物のように空中から砕け散ってくるイメージである。我々にとつて霜は「多く晴天無風の夜、気温が氷点以下に降るとき、空中の水蒸気が地表や物に接触して凝結し、白色の細氷を形成したもの」（広辞苑）であつて、地表や物に置くものであり、「霜ぞちりくる」というイメージとは遙かに遠く、とても「現象に即した捉え方」とは云いがたい。定家はいつたい霜をどのようなものと把握していたのか。定家における歌語としての「霜」について考えてみたい。

「万葉集」には「霜がおりる」ことを示す動詞に「フル」「オク」の二語が用いられている。例えば、

芦辺行鴨之羽我比尔霜、零而寒暮夕倭之所念(卷一・志賀皇子)

客人之宿将為野尔霜、降者吾子羽裏天乃鶴群(卷九・作者未詳)

などのように、「零」九例、「降」二例、「落」一例、「布里」一

例、「布利」一例があつていずれも「フル」と訓まれている。

今一つは、

秋田苜借慮毛未壞者雁鳴寒霜、毛置奴我(卷八・忌部首黒麻呂)

春去者水草之上尔置霜、乃消乍毛我者恋度鴨(卷十・作者未詳)

のように「置」九例、「於氣騰」一例があつて、「オク」の訓みである。

こうして「万葉集」では、「霜」に関して「フル」一四例、「オク」一〇例があつて、両動詞が拮抗して用いられているのである。その他「露霜」に関して「フル」一例、「オク」六例があるが、露霜をどう捉えるかについては古來諸説があり、近代では、武智雅一氏が「露と霜は二物であるが、ひとつの慣用的歌語と

して用いられた。」とし、兼川定一氏は「露と霜の中間物」とし、最近では橋本四郎氏が「露霜は霜でもなく、露でも霜でもない客観的対象をさすのでもなくて、露そのものなのである。

寒いはずの季節、秋の訪れと共に感覚の世界に姿を現す露の、その冷えくとした感じを表すのが露霜であろう。歌語として把握すべきものと考えられる。^(注2)とされている。「フル」が露に関して用いられた例はないので仮に露霜の実体が露の歌語であるとするれば、歌語としての「露霜」の霜の語から連想されて「フル」が用いられたことになるが、なお明徴を欠いているので、本稿では「露霜」について「フル」一例があることのみを指摘するに留めておきたい。

いったい、「万葉集」における「フル」「オク」の語の位相はどのようなものであつたのか。「万葉集」には白髪を霜に喩えた歌がみえる。

ありつゝも君をば待たむうちなびく我が黒髪に霜の置くま
で(卷二・磐姫皇后)

居明かして君をば待たむぬばたまの我が黒髪に霜は降ると
も(卷二・作者未詳)

とあつて、「オク」「フル」両語を用いているが、同様の歌であつて、「霜がおりる」という状況を表すのに「霜置く」「霜降

る」の二つの叙述表現をもつていたとみられる。

ところで、次のような例がある。

埼玉の小埼の沼に鴨そ翼霧る己が尾に降り置ける霜を払ふ

とにあらし(巻九・作者未詳)

右の旋頭歌では「降り置ける霜」とあつて、「降る」と「置く」とは区別されており、「降る」は雨や雪などと同じように天から降ってくる動作を示し、「置く」は霜が降りた状態を示しているとみることができると。

例えば、

天雲のよそに雁がね聞きしよりは、だれ霜降り、寒しこの夜は

(巻十・作者未詳)

では、大空の雲の外で鳴く雁の声を聞いてからは、はらくと霜が降って今夜は寒いことだの意であり、「はだれ霜降り」は具象的に霜の降る動作を示している。また、

天飛ぶや雁の翼の覆ひ羽のいづく漏りてか霜の降りけむ

(巻十・作者未詳)

の歌は、大空を飛ぶ多数の雁の、空を覆わんばかりの翼のどこを漏れて霜が降ったのだらうというので、「いづく漏りてか霜の降りけむ」も霜の降る様子を彷彿とさせる表現である。

もつとも、この両首はいずれも矚目の景を詠んだ歌ではなく、

「詠雁」「詠霜」の題詞をもつ詠物題の歌である。古来中国では霜は降るものであった。

すなわち、「礼記」(月令)に、

季秋之月(中略)是月也、霜始降、則百工休

とあり、また、「詩経」(豳風)毛伝に、

九月肅霜、十月濛場、朋酒斯饗、日殺羔羊。(毛伝)肅縮

也。霜降而收縮万物。濛掃也、場功畢入也。兩樽日朋饗者

卿人以狗大夫加以羔羊。

とあり、また、常建・泊舟肝胎詩には、

泊舟准水次 霜降夕流清

とあるごとく、「霜降」と表現された。(現在中国語では、「下霜」と言い、やはり雨や雪などと同様に降る物である。)従つて、詠物題の万葉歌が中国詠物詩の影響を受けた可能性は十分考えられるところであるが、必ずしもそう断定することは出来ないようである。というのは、「霜降る」という表現は「古事記」にはみえないが、最も古い用例としては、「播磨風土記」に、

愛しき小目の小竹葉に霰降り霜降るともな枯れそね小目の

小竹葉

とあつて、原文では「阿良礼布理、志毛布留等毛」とあるからである。

こうしてみると、古代日本語では、「霜降る」が文字通り天から霜が降るといふ動作を表わすのであつて、それはさらに「霜曇り」といふことばさえ生んでゐるのである。

霜曇りすとかあるらむ久方の夜渡る月の見えなく思へば

(巻七・作者未詳)

この「霜曇」について、「上代語辞典」は、「夜空の曇るのを霜が降るためと見ていう語」と解説し、「日本古典文学大系」頭注には、「氣象上、そのようなことはないが、当時の人々はそう考えたらしい。」と説明してゐる。^(注4)

かくして、古代日本語には、「霜フル」「霜オク」二系の表現を持ち、特に霜が雨や雪と同じように空から降ってくるものと考えたのであつて、霜を降物とみるところに古代日本人の霜把握があつたと考えられる。

二

ところで、「古今集」以後、王朝和歌では、「フル」系表現は次第に衰え、「オク」系表現が主流になつてくる。その様相は付表IIによつて明らかであろう。「古今集」では「オク」九例に對して「フル」は次の一例のみである。

水ぐきの岡のやかたに妹とあれと寝ての朝けの霜のふりは
も、(巻二十・大歌所御歌)

この歌は、共寝をした翌朝目覚めて、この霜の降り方はまあと驚いた歌で、おそらくは大歌所御歌の「水茎ぶり」として伝誦された歌と思われる。こうしてみれば「万葉集」以後「古今集」に至る間に「フル」系表現は急速に衰退していったものと思われる。

勿論「フル」系表現が全く跡を絶つたわけではない。「新撰万葉集」上巻には、

夏之夜之霜哉、降礼留、砥見左右丹荒垂宿緒照月影(夏歌)

とある。ただし、この歌も原歌である「寛平御時后宮歌合」では、

夏の夜の霜や、おける、とみるまでに荒れたる宿を照らす月影

(歌合大成)

とあり、あるいは「新撰万葉集」が真名表記に改める際に、漢詩的「霜降」といふ表現に改めたものであつたかも知れない。

「古今和歌六帖」には、霜題十八首があるが、「置く」十一首に對して「降る」は、

あま雲のよそにかりがね聞きしよりはだれ霜降りさむしこ
のよは(をとくる)

一首で、これは前掲万葉集所収歌の伝誦歌である。霜題以外では、「降る」を用いたのは、

おく山の霜ふりかゝるならのはあをかりしよりおもひそ

めてき(第四帖・さぶの思)

かささぎのはねに霜ふりさむきよをひとりやねなん君まち

かねて(第五帖・ひとりね・人まろ)

の二首で、後歌に作者名を「人まろ」と記すように伝誦歌であつて、兩首ともに内容からみて古歌であつたと思われる。

「拾遺集」所収の一首は、長歌で、

……すみの江の　さしの姫松　ねをむすび世々をへつゝも
しもゆきのふるにもぬれぬ　なかつなりなむ(雑下・脱人し
らず)

とあるもので、霜や雪が降つても濡れないようなという比喩表現で、「霜雪」は、

霜雪もいまだ過ぎねば思はぬに春日の里に梅の花見つ(万

葉集卷八・大伴宿祢三林)

の古語を用いたものである。

こうして三代集時代、「フル」系表現の歌は極めて少く、かつ現存歌も古歌ないし古語による表現の歌であつたとみられるのである。その後の私家集にも極めて少く、「曾丹集」「能因集」

に各一首を見出すに過ぎない。

かささぎのちがふるはしのまどほにてへだつるなかに霜や

ふるらん(曾丹集・冬)

なみだこそさわわたるなり夏の夜も霜やふるらんわれがな

げきに(能因集・下・有所歌二首)

前歌は「万葉集」の七夕歌に詠まれた鶴の橋によるものであり、後歌は前掲「新撰万葉集」の「夏の夜の霜や降れると見るまで」によつたものではなかつたかと思われる。

むしろ、王朝和歌では霜は露が凝結したものと考えられたた

うで、「倭名類聚抄」に、

霜　陸詞切韻云　霜凝露也、音蒼和名
之毛

とあり、室町期宗碩編といわれる「藻塩草」(古活字本)にも、

霜　冬又は春のもの也。露結びてしもとはなる也。天氣に

よつてかはる也。云々。

とある。事実、

草の上にごころ玉あし白露を下葉の霜とむすぶ冬かな(新

古今集・冬・好忠)

の歌もある。「霜凝露也」という発想は中国からのもので、漢詩

草木揺落露、為霜(文選)

萎蕤蒼蒼白露爲霜(毛詩)

などと詠まれたものであった。

三

ところで、好忠・能因の例がないわけではないが、「堀河院百首」以後、「フル」系表現が再び復活してくる。その先蹤とみなされるのは、「堀河院百首」の、

神なびのみむろの山に霜ふればゆふしでかけぬ辨ばぞなき
(冬・霜・師時)

玉ほこや朝行くみちの小ざさ原わくる裳すそに霜ふりにけり(同・肥後)

の歌で、師時詠は「金葉集」冬部に、
神まつるみむろの山にしもふればゆふしでかけぬさかきば

ぞなき

として入集している。

次いで、「為忠家初度百首」に、

にはもせにしもふりにけりおほとりのはねにのみとはおも
はざらなん(寒庭霜・為業)

よもすがらにはのからくさ風さえてはだらにけさはしもふ

りにけり(同・為盛)

と詠まれ、「崇徳院御時百首」では、教長詠、

ときはなるをざさがはらも霜ふればおなじかれ野にまがひ
ぬるかな(教長集)

「久安百首」には、小大進詠、

しもふればなべてかれぬる冬草もいはほがかげのはこそし
ほれね(物名・かかげのはこ)

「仁安三年、大嘗会悠紀方御屏風」に永範詠、

霜ふれどさかえこそませ君が代にあふさか山の関の杉もり
(千載集・卷十・賀歌)

などのごとく詠まれて、次第に明確な降物としての霜のイメー
ジを獲得してゆく。

「新古今集」には、次の二首が入集している。

秋さればかりの羽風に霜ふりてさむきよなよな時雨さへふ
る(卷五・秋下・人丸)

世の中のはれ行く空にふる霜のうき身ばかりぞおきどころ
なき(卷十八・雑下・慈円)

人麻呂歌は「万葉集」にはみえず、出典不明。おそらく前掲志
貴皇子の歌など万葉歌の変形されて伝誦された歌とおぼしく、
まさに万葉「フル」系の正統を伝えた歌であるといえる。慈円

の歌は、建仁元年老若五十首歌合歌で、「世の中のはれ行く空」は、治世の明るく治まつて行くそれを黎明に喩えた歌で、明るくなって行く空に降る霜のように、世を経る不遇な我が身は置き所もないと述懐した歌で、はれ・空・降る・霜・おきは縁語であるが、「空にふる霜」の表現が成り立つためには、中古の「霜凝露也」という霜のイメージではなく、「堀河院百首」以来復活してきた万葉「フル」系のイメージがあったと考えられるのである。

新古今歌人は共通して「霜降る」と詠んでいる。

いほうとき夢路も袖にかよふなり霜、ふる山のよひの篠原
(王二集・冬部)

うちわたすまがみかはらの夕風にころもで寒き霜はふりきぬ
(同・西園寺三十首・冬五首)

道のへのひとごとしげき思草しものふりはと朽ぞはてぬる

(拾遺愚草・関白左大臣家百首・怨恋)

月にふくあらし許やむかへけんみなみの山のしものふるみち
(同・山家)

家隆の「いほうとき」は正治元年春、良経家十首歌合・山家夜霜題で、宵のころ霜が一面に降る山の篠原を通して、草庵には疎遠な夢路も伏す袖に通ってくるようだというのであり、「うち

わたす」の歌は、見はるかす飛鳥の真神が原を渡ってくる夕暮の風に袖も寒く、その上霜も降ってきたというのである。もつとも「新編国歌大観」(蓬左文庫本)によつたが、高松宮本「玉吟集」には「雪」とあつて、あるいはこの方が正しいかと思われる。定家の二首は、いずれも貞永元年九条教実家百首詠で、前歌「しものふりは」は霜の降つた葉の意であり、後歌は、都太尉の故事に基いて、南の山の霜の降る道では、月光に照らされてさびしく吹く山風だけが、薪拾いから帰る都太尉を迎えたことであろうというので、ともに「霜降る」イメージの濃い歌であつて、「堀河院百首」以後復活してきた「フル」系表現が次第に定着して来たことを示していると思われる。

四

付表Iにみられるように、霜は「古今集」以後「詞花集」まで多くはなく、「千載集」で漸増し、「新古今集」で飛躍的に増加した歌材である。そして霜の歌は、付表IIにみられるように述語表現の多様化によつて霜美の種々相を表現してきたのであるが、素材の組合せの面からみると、白菊と霜、月と霜との組合せが顕著である。そして白菊と霜との結合は「古今集」よ

り「新古今集」に至る各集にみられる伝統化した素材であるが、月と霜の組合せは、王朝和歌の世界で新しく漸増していった素材である。月と霜の歌は「後撰集」一首、「後拾遺集」二首、「千載集」四首、「新古今集」八首が入集している。

「後撰集」「後拾遺集」の三首を掲げると、

今夜かくながむる袖のつゆけきは月の霜をや秋とみつらん

(後撰集・夏・よみ人しらず)

夏の夜もすずしかりけり月、かけ、は庭しろたへの霜とみえつゝ、(後拾遺集・夏・長家)

白妙の衣のそでを霜かとはらへば月の光なりけり、(後拾遺集・秋上・藤原国行)

遺集・秋上・藤原国行)

「後撰集」の歌は、月光の白くきらめくのを霜と見立て、「月の霜」から秋を連想して月を詠めつゝ袖に涙するのであり、「後拾遺集」二首も「月の霜」を詠んだもので、李白「静夜思」の「牀前看月光 疑是地上霜」と同様、月光を霜かと疑うのである。

「月の霜」は既に大江千里の「句題和歌」の「月照平沙夏夜霜」

(白氏文集)題で、

月影になべてまさこの照りぬれば夏の夜ふれる霜かとぞみる

と詠み、「月の霜」は漢詩から影響された表現であったと思われる

る。

こうした「月の霜」の発想は、「千載集」にも流れ込み、

さえわたる光を霜にまがへてや月にうつる白菊の花(千載集・秋下・藤原家隆)

載集・秋下・藤原家隆)

住吉の松のゆきあひのひまよりも月さえぬれば霜はおきけり、(千載集・神祇・俊恵法師)

り、(千載集・神祇・俊恵法師)

などの歌にその影響をみることが出来る。「新古今集」にも定家、

ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月かけ

(秋下・定家朝臣)

の歌では、霜が床を照らす月光を仲間の霜とみて「おきまよふ」というのであり、また、

霜まよふをだのかりほのさむしろに月ともわかずいねがて

の空(拾遺愚草・下)

の歌も、霜が月光と区別できないほどに置いているというので

あって、「月の霜」の影響を受けた発想の歌である。

しかしながら、新古今時代の霜の歌は、「新古今集」が撰入し

た、

冬枯のもりのくちばの霜の上におちたる月の影のさむけさ

(冬・清輔朝臣)

などのような叙景歌の系譜の線上に、次第に霜のもつ冴冷美の種々相を多角的に表現した歌が多くなってゆく。

定家は、初期の「閑居百首」で、

さびしさは霜こそ雪にまさりけれ峯の梢のあけほの、空

と詠み、冬の厳しい冷美に霜の本意をみようとした。そして、

霜ふかき沢辺の芦に鳴くつるの声もうらむるあけぐれの空

(閑居百首・冬)

芦鴨のさはぐ入江につらゝあてかさなる霜のいくへさゆら

ん(四十七首和歌・冬)

天河夜わたる月もこほるらん霜に霜おく、かさゝぎのはし

(詠百首和歌・四季月)

など「霜ふかき」「かさなる霜」「霜に霜おく」などの表現をか
さねて、その悽愴ともいふべき冬霜の冷美の世界を構築してい
ったのである。

最初に掲げた定家の、

さえとほる風のうへなる夕月夜あたる光に霜ぞちりくる

の歌は、このような新古今時代の霜の捉え方の上に立つて、月
光と風と霜を等価に捉え、純感覚的にその美を表現した作であ
る。この歌を正確に理解するには二つのことが必要である。そ
の二つは前述してきたごとく「霜ぞちりくる」という表現で、

それは「フル」系表現復活によって初めてイメージ化された表
現であること。今一つは風と霜との関係である。現代の我々は、
霜が無風状態の時凝結することを知っている。しかし、古くは
風を伴って霜が降ると考えられていた。例えば前掲の、

秋さればかりの羽風に霜ふりてさむきよなよ時雨さへふ

る(新古今集・秋下・人丸)

のように「雁の羽風によって霜が降って」の意として伝誦され
ている。定家も、

庭の松はらふ嵐におく霜をうはげにわぶるをしのひとりね

(正治初度百首)

さむしろに初霜さそひふく風を色にさえゆくねやの月影

(詩歌合・月明風又冷)

いはしろの野中さえゆく松風にむすびそへたる秋の初霜

(千五百番歌合)

のように詠んでおり、風を伴って霜が降る(置く)という現実には
あり得ない、しかも現象としてはいかにも實在感を有する詩
的現実の世界を形象化してみせたのである。従ってこの歌は、
現象に即して詠んだとき歌ではなく、伝統化された歌語によ
ってイメージされた、いかにも定家らしい純感覚による美的形
象の世界を表現した歌なのである。

水」は注文がやゝ混濁しているが、これは注釈の過程から生じたもので、前稿である「野中の水」では「霜まよふ空は、霜のふる空といふこと也。」とあり、また、飯田図書館乙本にも「しまよふは霜のふるといふこと也。」とあって、最終稿に「おきまよふ」説を提示しているのであって、注文に前稿の名残りがあって、やゝ不徹底な文となっている。近代諸注釈書で最も詳細なのは、久保田淳氏「新古今和歌集全評釈」で、氏は右の両説を踏まえて近代諸注を検討し、「霜まよふ」は「霜置きまよふ」の縮約表現であって、「霜降りまよふ」の略ではないとされた。定家の用例を検討してみると、「霜降りまよふ」の例はなく、「霜置きまよふ」の例は次のごとくである。

(正治初度百首・秋十五首)

ひとりぬる山とりの尾のしだりをに霜おきまよふ床の月か
げ(千五百番歌合・秋歌)

さびしとよをさまよふしもの夕まぐれをかやのこやの野べ
のひと村(韻哥百二十八首・冬歌)

ととせあまりみとせはふりぬよるの霜おきまよふ袖に春を
へだて、(院五十首・雜)

黒かみのながきやみぢもあけぬらんおきまよふ霜のきゆる

朝日に(尺教・磐姫皇后)

これらの歌の「おきまよふ」の表現は、「堀河院百首」霜題の俊類の歌、

住吉のちぎのかたそぎゆきもあはで霜おきまよふ冬はきに
けり

に拠るものであろう。この俊頼歌は、住吉社の千木の片そぎはきちつと交差していないので、霜がどちらへ置くべきか迷うというので、「おきまよふ」の原因が明示されている。定家の歌においても、「白妙の」の歌では「衣しでうつひゞき」が、「ひとりぬる」の歌では「床の月影」が「霜おきまよふ」原因となっている。ところが、「さびしとよ」「ととせあまり」「黒かみの」三首では「おきまよふ」の原因を示す表現はなく、「おきまよふ」は霜の置く状態そのものを示していることになる。

そのことをさらに明確に示しているのは、「まよふ初霜」の歌である。

さびしきはおきそへてけり秋のえの秋の末葉にまよふ初霜
(皇太后宮大輔百首・秋)

ふせぐべきかたこそなけれ白菊のうつろふうへにまよふ初霜
(名号七字和歌・秋)

これらの歌の場合も「まよふ」は「おきまよふ」の凝縮表現で

以上が定家の「さえとほる」の歌についての霜のイメージが有する歌語の分析であるが、定家の霜の歌をみると、付表Ⅰの霜の語数はともかく語彙の中は『万葉集』を出るものではない。むしろ定家の霜の歌の特色は付表Ⅱにみられるように述語表現の多様性にあり、『新古今集』をこの面でも遙かに超え、定家が新古今前衛歌人であった足跡を窺うに足るものであるが、「フル」「オク」系表現を問題にすれば、勿論王朝和歌の伝統である「オク」系表現が圧倒的に多いことは云うまでもない。例えば

「オク」系表現では、おく二九例、おきそふ三例、おきそむ一三例、おきまよふ五例の三八例に比して、「フル」系表現は、ふる三例、ふりは一例とそのバリエーションと目される、おちちる(霜雪)一例、ちりく一例の六例を数えるに過ぎない。この両表現の中間にあつて異説の多い「霜まよふ」の表現について次に考えてみたい。

定家の「霜まよふ」の歌は次の二首である。

霜まよふ空にしをれしかりがねのかへる翅に春雨ぞふる

(建久九年夏・仁和寺宮五十首・春二十首)

霜まよふを田のかりほのさむしるに月ともわかずいねがての空(建仁二年三月六首・秋歌)

右の二首について、特に『新古今集』春上に入集した前歌について解が分かれている。古注で「霜まよふ」の表現について言及しているのは「増抄」「八代集抄」「折られぬ水」で、関係注文を掲げると、

〈増抄〉霜まよふとは、霜の置たるやうにあると也。まよふとは似たると云心有。いかんとなれば、かりのくる時分に、霜のおきたるやうにはげしき秋天の事也。或説にはかへる翅とあるに對すれば、翅の霜置てまよひこしといふ心とかと也。

〈八代集抄〉霜まよふそらとは、霜のふりみだれし空をいふなるべし。

〈折られぬ水〉しもまよふは霜おきまよふのおきをはぶける詞にて、霜のふるといふ意也。上句のしをれしといふことを下句へひゞかし、下句の翅といふことを上句へひゞかしたる格にて、霜のふる空につばさのしをれこし雁の、又かへる翅に春雨のふりて、しをれ行はあはれ也といふ意也とあつて、『増抄』『折られぬ水』が「霜おきまよふ」説、「八代集抄」が「霜ふりまよふ」説といえよう。もつとも「折られぬ

あるが、これらの歌の背後には、

心あてに折らばや折らん初霜のおきまどはせる白菊の花

(古今集・秋下・躬恒)

がある。しかし、ここでも古今歌の「おきまどはせる」に示される明確な対象関係はなく、「ふせぐべき」の歌にわずかに「白菊のうつろふ」花びらに置こうとする初霜を「まよふ」と云うのであるが、「さびしきは」の歌では迷う対象は明確ではない。

こうして、定家の歌の「霜おきまよふ」「まよふ初霜」の例をみてくると、もとく擬人化表現として出発した「まよふ」の意味は次第に擬人化表現の本意を失ってゆき、霜が紛乱と置く状態そのものを示すようになってくる。そして「まよふ初霜」が「おきまよふ初霜」の凝縮表現であるように「霜まよふ」も「霜おきまよふ」の凝縮表現とみるべきであろう。

ここで注目しておきたいのは、定家の歌で「霜まよふ」「霜おきまよふ」「まよふ初霜」の歌が殆ど凡て秋霜の状態を表現していることである。例外は「さびしとよ」(冬歌)の一首のみである。冬霜については「うづむ」二例、「たまる」二例、「こぼる」一例、「つもる」(霜雪)一例、「ふかし」六例などのように霜が深く積った状態を表現しており、「霜まよふ」「霜おきまよふ」は秋霜に関する表現であったといえるのではなからうか。

「霜まよふ空にしをれしかりがねの」の歌の霜も秋霜である。

「礼記」(月令)では、「仲秋之月(中略)鴻雁来り玄鳥帰る」とあるごとく、雁は仲秋の頃飛来する渡り鳥である。とすれば「霜まよふ」について「霜のはげしく乱れ降る」(日本古典文学大系頭注)の通説はおかしい。「霜まよふ」を「霜おきまよふ」の凝縮表現とみると、久保田氏が云われるように、雲路などの空の通路を想定し、そこに霜が乱れ置く意となるが、その霜が秋霜であつてみれば、久保田氏が「増抄」或説について「雁が「まよひこしといふ心」と「まよふ」を雁の状態とみようとしている点は頗みられてよい。霜の状態には違いないが、雁が迷うような霜の状態だと見たい。」とされるのはいかがであろうか。秋霜であれば雁が迷うほど深く置いた霜ではない。むしろ、さらく〜と紛乱する霜の状態そのものを「霜まよふ」と表現したとみるべきである。勿論この歌が来雁の「しをれし」翅と帰雁の春雨に濡れる翅を対照していることから来雁の霜に萎れた敵しい寒さを強調することは誤りではないが、やゝもすれば「鳥の中にも雁は生徳辛勞する物也。遠境をしのぎて、北の国の露霜にぬれ、又春といへば細雨にしほれてあはれふかき時也。」(新古今拔書抄)など古注の捉え方が従来の諸注に影響しているのであるまいか。

定家のこの「仁和寺宮五十首」詠と前後して良経の「西洞隠士百首」にも、

霜しもまよふ庭の葛原色かへてうらみなれたる風ぞはげしき

(秋二十首)

がある。「西洞隠士百首」の詠歌年次は不明であるが、良経寛居中の作であり、定家の「霜まよふ」が新奇な表現の最初であつてみれば、定家が良経歌の「霜まよふ」の影響を受けたと考えるよりも、良経が定家の「霜まよふ」という新奇な表現を採つたとみる方が自然である。そして良経のこの歌も秋霜の状態を詠んだものであつて、秋霜がきら／＼と置き乱れるの意である。

注1 「定家の歌一首」(桜楓社・昭51刊)

注2 武智雅一「露霜攷」(万葉・昭28・4)、桑川定一「露霜私考」(万葉の露霜一)(国語国文・昭33・6)、橋本四郎「万葉集の語彙」(講座日本語の語彙「古代の語彙」明治書院・昭57刊)

注3 定家の韻哥百廿八首に「わけのほる庵のさゝはらかりそめにこととふそでもつゆに零つゝ」があるが、一般に「おちつゝ」と訓まれている。これは韻字であり、久保田淳氏「藤原定家全歌集」上の注に「零は「荒蕨頰韻」の「百九」で「レイト。ヲチ」と訓む。」とあるごとく、「零」はおつの訓である。なお、「露霜」に「ふる」(掛詞)を続けた例に後代の歌ではあるが、「露霜のふるさと人の唐衣おなじ夜寒にうたぬ間もなし」(統後

拾遺集・秋下・為氏)がある。

注4 定家の歌「霧にみしおもかげよりもさびしきは霜にくもれる野への明ほの」(夫木和歌抄・卷十六・霜)は万葉集の「霜曇」によるものである。

注5 「かりの羽風に霜ふりて」について近代注は疑問を呈し、「雁のつばさに霜ふりて」の本文に拠るべきとするものもあるが、風と霜との関係を考えると、新古今時代歌人は「かりの羽風に」の本文に疑問を感じなかつたと思われる。

付記 本稿は昭和六十一年七月、和歌文学会関西例会(於光華女子大)で、「定家の霜の歌」と題して口頭発表したものである。

付表 I

	霜	初霜	朝霜	夕霜	風霜	露霜	霜雪	霜水	霜夜	霜晏	霜枯	計	全歌数	用例比
万葉集	28		4			26	1		1	1	1	62	4540	1.37
古今集	9	4				1		1	1			16	1111	1.44
後撰集	12				1						2	15	1425	1.05
拾遺集	10						1				3	14	1360	1.03
後拾遺集	8		1								4	13	1229	1.05
金葉集	4					1			1			6	717	0.84
詞花集	2	1				1						4	420	0.95
千載集	16	1									3	20	1290	1.55
新古今集	41	1		1		3			3		1	51	2009	2.54
定家	124	9	6	1		13	3		5	(1)	2	164	4601	3.56

附表II

	霜おく	霜おきまよふ	霜おきそふ	霜おきそむ	霜まよふ	霜ふる	霜ちる	霜雪おちる	霜けぬ	霜とく	霜きゆ	霜枯る	霜むすぶ	霜むすびそふ	霜むすぼほる	霜こぼる	霜うづむ	霜雪つもる	霜かたまる	霜たまる	霜さやぐ	霜さひる	霜けやすし	霜さびし	霜ふかし	霜くらし
万葉集	10				14			6															1	3		
古今集	9				1														1							
後撰集	8								1																	
拾遺集	4				1																					
後拾遺集	3							1		1																
金葉集	2				1																1					
詞花集	4										1															
千載集	5				1						3										3					
新古今集	10	2			1	2				2	2	3		1	2						2	1	1		2	
定家	29	5	3	1	4	4	1	1					6	3	1	1	1	2	1	1	1	10	1		6	1